

I. 都市・地域マネジメント(都市・地域マネジメント小委員会)

序章 はじめに(目的・概要)

西村幸夫 / 東京大学・教授

1. 本セクションの目的と対象

本セクションでは、環境技術をはばひろく、都市や地域のサステナビリティを支えるためのハード・ソフト両面の施策ととらえ、それが都市および地域のマネジメントの側面でどのような政策や技法を要請しているのかを概観している。そしてこれらの議論を通して、都市・地域マネジメントにおいて、広範な環境技術を応用していくための政策提言を行うことを目指している。

本セクションが対象とする都市・地域とは、ひろくは行政単位としての地方公共団体(大都市や県・州などの広域行政団体を含む)からミクロには一体開発された住宅団地のレベルまでの幅を持っている。

さらに本セクションが論じる環境技術とは、最新の科学技術の成果としての環境の維持保全のための工学的技術から、歴史的な集落が持つ伝統的な知恵としての環境の維持保全システムまでの幅を持っている。

2. 本セクションの概要

都市・地域のスケールの小→大を横軸に、環境技術の先端性→在来性を縦軸にマトリックスを描き、本セクションの議論をこの中に落とし込むと第1～第4象限には本章の各節が表のように配置されていることが分かる。

第1章の「環境技術に関する都市・地域マネジメン

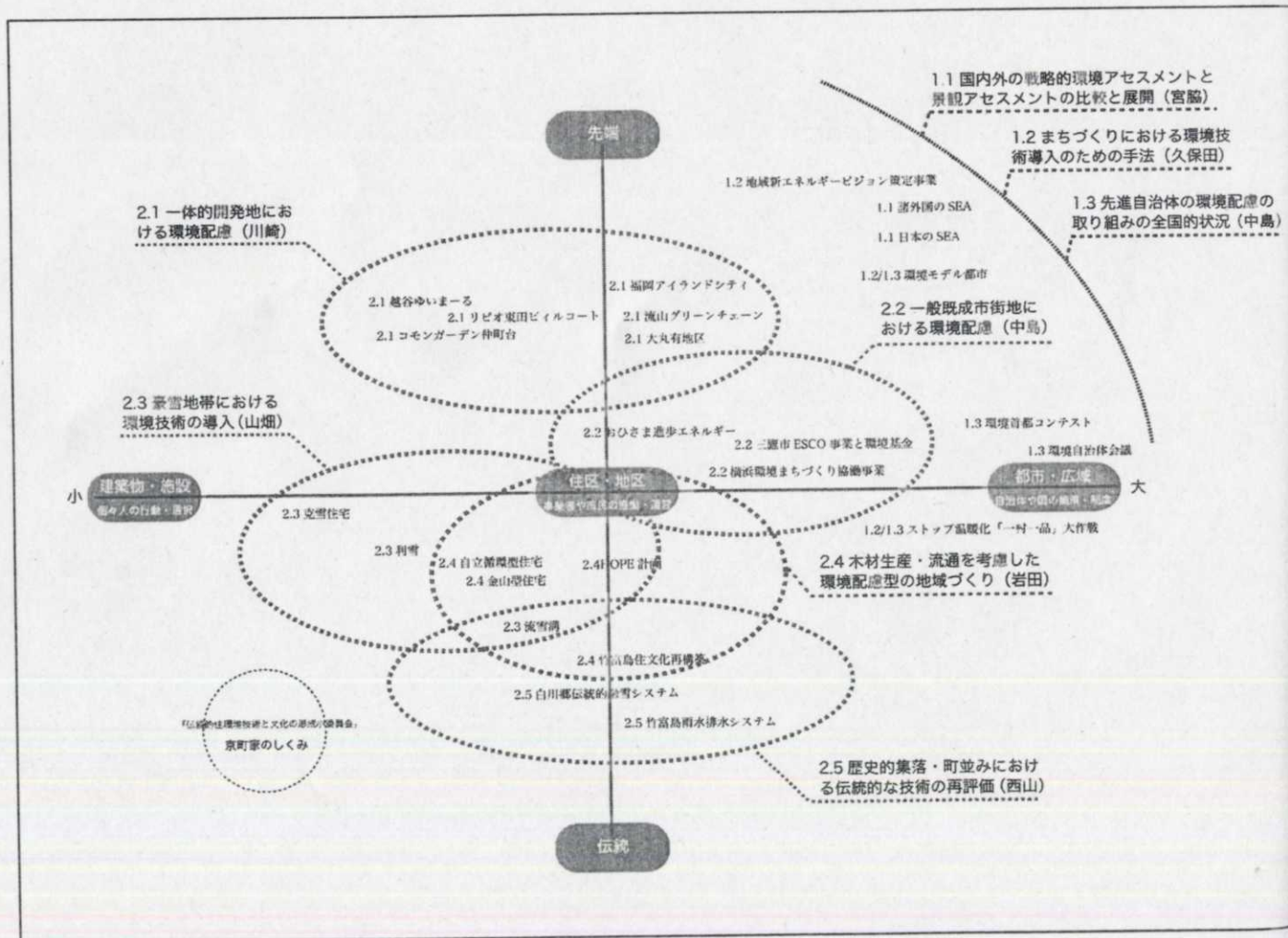


図 本セクションの構成

(作図：中島直人)

トの政策的動向」は、文字通り広域スケールにおける主として先端的な環境技術の誘導施策が中心である。

つづく第2章、「環境技術に関する都市・地域マネジメントの地域的展開」は、主として地区スケールでの環境技術の議論が中心であるが、環境技術の内容は伝統的なものから先端的なものまで幅広い。

最後に第3章として「環境技術に関する都市・地域マネジメントのあり方の提言へ向けて」と題して、これまでの主張をまとめて、政策提言へ向けた考え方の方向性を論じている。

特に、広域における環境技術とは、単体の建築物を対象とした環境技術とは異なり、環境技術を引き受ける側の態勢の問題が重要となってくる。すなわち合意をいかに形成していくかという問題である。このことは同時に、在来型の環境技術や伝統的な環境技術の見直しの問題をも含んでいる。

3. 各節の概要

各節の概要は以下の通りである。

1.1 節は主として欧米先進諸国における戦略的環境アセスメント(SEA)の現状を報告し、並行して景観アセスメントの実情とこれとSEAとの関係について考察している。日本におけるSEA導入は初歩的な段階にあり、なかでも都市計画分野でのSEAが遅れているという現状において、どのようにSEAが受け入れられることになるのかについて論じている。

1.2 節は新エネルギー利用や自治体の温暖化対策推進のための施策を論じている。特に交通分野において種々の施策が試みられている様子が報告されているが、同時に新技術に過度に依存することへの警戒が必要であることも指摘している。

1.3 節は環境配慮に関する先進自治体の取り組みを、環境自治体会議の活動やNPO環境市民が主催する環境首都コンテスト、国による環境モデル都市の選定などを紹介して、それらの自治体における環境思索の拡がりを論じている。

2.1 節はオフィス街や住宅地などの一体的開発地における主としてハードな環境配慮の技術を紹介し、こうしたハードが推進されるために考慮されたソフト施策にも論及している。

2.2 節は2.1 節と同様の視点で既成市街地の施策を論じている。

2.3 節はとりわけ環境配慮が重要となる豪雪地帯における施策を公共の場と私有地内の雪処理に分けて、現在の考え方をまとめている。

2.4 節はHOPE計画を軸に、木材の生産・流通と

いう側面から省エネや地場産材の利活用などの面で、環境に配慮した地域づくりがどのように進められてきているのかを紹介している。

2.5 節は歴史的集落・町並みにおける伝統的な環境配慮の知恵について、微地形を利用した集落全体の雨水排水システムや、伝統的な融雪システムを再評価する中から、今日にも活かすことのできる環境技術のあり方に関して問題提起を行っている。

この問題提起は先述した1.2 節における疑問と呼応している点は、本問題の将来を考える上で示唆的である。

4. 提言の方向性

本セクションが「都市・地域マネジメント」を標榜しているのはある意味で象徴的である。

つまり、ここでは環境技術そのものと同時にそれを受け取り、使いこなす側のマネジメントの方法が問われているのである。そしてそのことは、必ずしも先端的な技術が受け手側から見ると受容可能な最適解とはならないということを示唆している。在来型の環境技術や伝統的な環境技術の見直しはこうした文脈の中で再評価されることになる。

ここに本セクションの提言のひとつの問いかけがあるのだと考える。